

平成28年度  
入学試験問題

国 語

2月2日 午前

受験番号	氏 名

中村中学校



□ 次の(1)～(10)の——線のカタカナを漢字になおして答えなさい。

- (1) 両親をソ<sub>ン</sub>ケイ<sub>イ</sub>している。
- (2) 予定をテ<sub>チ</sub>ヨウ<sub>ウ</sub>に記入する。
- (3) キョウ<sub>ウ</sub>メイ<sub>シ</sub>してひびき合う。
- (4) 平家がシ<sub>ユ</sub>ク<sub>テ</sub>キ<sub>ト</sub>対決する。
- (5) 人工<sub>エイ</sub>セイ<sub>イ</sub>を打ち上げる。
- (6) 芸術作品をソ<sub>ウ</sub>サク<sub>ス</sub>る。
- (7) 水分がジ<sub>ョ</sub>ウ<sub>ウ</sub>ハツ<sub>ス</sub>る。
- (8) お茶がす<sub>つ</sub>かり<sub>サ</sub>める。
- (9) 道が左<sub>右</sub>にワ<sub>カ</sub>れる。
- (10) えん<sub>ぴ</sub>つ<sub>を</sub>カ<sub>リ</sub>る。

〔二〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\* 字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

わたしはもう八十年も<sup>ア</sup>の長い年月を生きてきました。この本を読

1

んでくれるみなさんと同じ<sup>ねんれい</sup>年齢だったころ、日本はアメリカや中国と戦争をしていました。太平洋戦争です。わたしが小学校を卒業して中学に入った夏休みに、日本は戦争に負けました。

みなさんは、日本がアメリカと戦争をしていたなんて想像しにく

5

いでしょう。それはまだ十年か十二年くらいしか生きていないみなさんにすれば、七十年前のことは遠い昔の話だから、しかたのな

イ

なことです。でもそれはほんとうのことでした。

第二章で、わたしが町工場の見習工になったときの話を書きました。

ウ

そのときわたしが住んでいた家は、バラックと呼ばれた掘っ建て小

10

屋でした。空襲<sup>くうしゅう</sup>で火災になった焼け跡<sup>あと</sup>から拾ってきた焼けトタン

(いちど火をくぐったトタン板)で囲った小屋は、指で押すと穴が

あくほどでした。雪が降った朝、目を覚ましたら布団<sup>ふとん</sup>の上に雪がうつ

エ

すら積もっていたくらいです。工場の機械や工具だって同じような

ものでした。焼け跡から掘り出した工具を修理したものがたくさん

15

ありました。空襲にあっても焼けないように土のなかに埋めておい

た旋盤<sup>せんばん</sup>を、磨き<sup>みが</sup>なおして使っていた町工場もありました。

そんな機械や工具を使ってはじまった日本の戦後の工業ですが、

三十年四十年の間に、日本は世界で最も優秀<sup>ゆうしゅう</sup>な工業国に発展した

のでした。発展することができたのはなぜでしょう。それは、日本

20

人がとても勤勉だからです。まじめに、よく働く国民だからです。

働くことが好きだから、とも言えます。

a

たくさん

人のなかには、なまけて遊びたがる人もいます。

b

遊ん

で楽をしていたほうがいい、汚れて疲れる<sup>つか</sup>仕事をするより、楽して

お金をもうけるほうがいいなんて考える人が、まるで成功した人の

25

ようなあつかいを受けた時代もありました。

c

日本人は、そういう考えかたを反省して、

d

ま

じめにこつこつと働いてこそより豊かな生活ができるのだ、と考えるようになる国民なのです。そうなることができたからこそ、日本

は世界でもまれなほど平和で豊かな国と言われるようになりました。

30

ただそういう反省には、とても時間がかかります。個人の反省な

らある日とつぜんにでもできますが、日本人みんなが反省するとな

れば、何年も何十年もかかることもあるのです。

わたしがNC旋盤という便利な機械を使いはじめた経験から、機

械の便利さにたよって楽ばかりしていると進歩が止まってしまふの

35

ではないか、と心配したのは一九七〇年代から八〇年代にかけての

ことでした。その不安を文章に書いたり話したりすると、賛成して

くれるのはわたしと同じように小さな工場の人たちで、大きな工場の人たちにはなかなか理解してもらえないと思っていました。

しかしそうではなくて、やがてわたしの知らないうちに、大きな工場①で働いている人たちも、だんだんとその不安を大きくしていったのでした。わたしが最初にそれを知ったのは、自動車メーカーのトヨタという会社でのことでした。

わたしがトヨタの本社工場に招かれて、そこで働く人たちに「技能を持つよろこび」という講演をしたのは、一九九四年のことです。技能とは、ものづくりの知恵と技のことです。わたしはそこで自分の体験や、知り合いの工場の人たちのすばらしい工夫の話をしました。最初は、日本でも最も早くから新しい機械を入れ、ロボットが活躍しているトヨタだからわたしの経験なんか役に立たないのではないかと不安でした。しかし、トヨタの工場の人たちは、わたしの話をとてもよろこんで聞いてくれたのです。

実はトヨタの人たちの間では、わたしが心配したように技術の進歩が止まるという不安だけではなくて、自動車工場で働く若い人たちが、働いて自動車をつくっているのに、自分が自動車をつくっているのだという誇りも情熱もなくなって、ただ給料をもらうために会社に来ているにすぎないような気持ちになってしまふ、ということとを心配していたのでした。

トヨタは、それからしばらくして、ひとつの自動車組み立て工場からロボットをほとんど取りのぞいて、人の手で組み立てるように工場の設備を変えてしまいました。そのようなテレビ放送で見たわたしは、さすがはトヨタだと思いました。トヨタは、もとをたどれば発明王の豊田佐吉がつくった豊田自動織機からスタートして、

技術研究には特に熱心だからこそ、日本一の自動車メーカーになった会社なのです。

そのころからは日本のあちこちの工場で、まだコンピュータ制御の機械ができる前の、旧式の機械でものづくりをしてきた人たちの知恵や技を、もう一度見なおそうという運動がさかんになりました。いつときはもう時代おくれたと退職させられたり、機械から離されて草むしりをさせられたりしていたような人たちがさえました。今度はそういう人たちから、新しい機械しか知らないような若い人たちが学ぶために、工場のなかに技能塾をつくったり、マイスター（親方とか師匠のこと）制度をつくってその人たちを先生にしたりする会社が、次から次へと現れました。

日本ってすごい、とわたしは思いました。なにがすごいかというと、工場の現場で働いている人たちがすごいんです。これではいけないと思う人たちが、ではどうすればいいかを考えて、それを実行して、働きかたを変えるために努力をすることがすごいんです。

これは、ことばを変えると次のように言いあらわすことができる  
のではないでしょうか。旋盤でも溶接や塗装のような仕事でも、自  
分の手で機械を使って削ったり溶かしたり塗ったりしていたときに  
は、それを「自分がつくっている」と自覚することができました。

80

できあがった製品を見たときに「これはわたしがつくったんだ」と  
思うことができました。ところがNC旋盤でつくったものは、「自  
分がつくった」とは思えなくて、「つくれてしまった」とか「つく  
らされた」という感じになってしまうのです。働いているのに、つ  
くっていると思えるのと、つくらされているとしか思えないのでは  
は、まるでちがうと思うのです。

85

A く B くとはニンベンがつくつかつかないかのちがいで  
すが、仕事をしていて「つくっている」と「つくらされている」  
のとは、まるでちがいます。ものづくりは人の役に立つものをつ  
くる仕事ですが、ニンベンをとってしまつと、お金をかせぐためだ  
けの仕事になってしまつのです。ものをつくつて働く人たちが、た  
だお金をかせぐためだけに会社に来ているとなつたら、いいものを  
つくろうという情熱をなくしてしまいます。

90

それではいけないと反省して、日本中のものづくりをする人たち  
が「ものづくりは X づくり」だと考えるようになったのです。

95

☆

ただわたしは、技術の進歩にたよるあまり人間がなまけ者になつ  
てはならないと思うのです。そのためには、新しい機械を使う人た  
ちも、ただ機械の「お守り」をしているだけではなくて、その機械  
の能力をもっとよくするために勉強したり工夫をしたりするべきで  
はないだろうか、と思うのです。

110

みなさんが大人になつて、社会人として働くようになるころには、  
いまよりもっともつと便利な機械や道具ができるでしょうが、どん  
なに機械が発達しても主人公は X だということを忘れないでく  
ださい。

115

もちろんわたしは、NC旋盤やロボットという機械が悪いなんて  
すこしも考えていません。機械の進歩によって、以前よりもずつと  
いいものがたくさん、しかも安くつくれるようになったからです。  
いまではほとんどの町工場も新しい機械を使って仕事をしています。  
産業用ロボットはいまでは一年間に約十万台もつくられて、日本は  
世界一のロボット大国と言われています。十万台のうちの約三分の  
一は自動車工場で溶接や塗装のためのロボットとして活躍しています。  
技術の進歩は、だれも止めることはできません。産業用ロボット  
をつくる技術を発展させて、災害のときに活躍するレスキューロボッ  
トや、体の不自由な人のための介護ロボット、危険な場所、深海や  
宇宙で活躍するロボットなどがこれからもつとできるでしょう。

105

(小関智弘『町工場のものづくり』)

問四

問一 ～～～～線ア～エの「の」のうち、性質のちがうものをも一つ選

び、記号で答えなさい。

——線②とありますが、実際に「実行した」ことを次のよ  
うにまとめました。 1、 2 にあてはまる内容  
を本文中の言葉を用いて答えなさい。

問二

a

d

に入る語を次からそれぞれ選び、記号

で答えなさい。

ア、でも イ、また ウ、やはり エ、もちろん

トヨタの工場では 1 (三十五字以内)。

さらに日本のあちこちの工場では 2 (十一字) をつ

くり旧式の機械でものづくりをしてきた人たちの知恵や技を生  
かすようにした。

問三

(1) ——線①の「不安」の内容が書かれている部分を三十

五字～四十字でさがし、その最初と最後の五字を答えな

さい。

問五

A

B

に入る漢字一字をそれぞれ考えて書きなさい。

問六

本文中に二箇所ある X に入る適切な一語を答えなさい。

(2) トヨタの社員は、——線①の筆者の「不安」に加えて

どのようなことを心配していましたか。本文中の言葉を

用いて五十五字以内でまとめなさい。

問七 次のア～エについて本文の内容に合っているときは A を、

そうでないときは B を解答らんに入記しなさい。

ア、日本は戦争に負けた後、努力によって三、四十年で世界有

数の工業国に発展した。

イ、日本は現代までずっと、勤勉に働く人のみが成功者であると認められてきた。

ウ、人間がなまけ者になってしまっているので、今後の機械の発達は望ましいものではない。

エ、仕事をする上で自分でやるという意識とやらされているという意識では大きくちがう。

問八 ☆の部分には筆者の考える機械との接し方が書かれています

が、あなたは機械とどのように接していきたいと考えますか。具体的な機械の例を一つあげ、説明しなさい。

〔三〕 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

\*設問の都合により省略した部分があります。

字数指定のある問題については、句読点・記号も字数に数えます。

「大夢」は母を病気で亡くし、現在父と二人で暮らしている。下校時に、同じクラスの「邪悪な軍団」と呼ぶいじめっ子集団に追いかけられ、逃げ切れなくなって、ある家の庭へ隠れ込んだ。そこで、その家の「香奈子」と出会い、家に入り、もともと料理学校の先生をしていたという「香奈子」の作ったシフォンケーキをこちそうになりながら、話をしている。

おしゃべりをしながら、香奈子はそれとなく、大夢を観察してみる。素直で優しい子だということは、初めて見たときにわかった。

「学校でも、声を出さないでいるの」

「なるべく、そうしている」

ふれてほしくない話題なのか、大夢はまっげをふせた。どうやら学校と家庭は、大夢にとってあまり楽しい場所ではないらしい。

「食べ物好ききらいはあるのかしら」

「特にはないと思うけど」

まだ食べたことのないものが、たくさんある。だから、はっきりとはいえないと大夢がいう。おもしろい言い方だと香奈子は感心した。

「どんなものを食べてみたいと思っているの」



香奈子に問われ、大夢は腕を組んで考える。

「シカのいぶし肉とか、イチジクの実とか」

大夢はそれらを歴史物語で知った。逃亡する勇者の好物であり、

☆ のときに、勇者の命を救った食べ物だった。

「へえ。なかなかしぶい好みね」

香奈子は笑った。食<sup>こう</sup>べることへの好奇心<sup>こうきしん</sup>を、大夢は持っている。

青白い気弱そうな顔に似合わず、

「食事はお父さんが作ってくれるの？」

香奈子は、大夢の疲れた様子が気になった。邪悪な軍団からの逃

亡の日々が、大夢の少ないエネルギーを、すっかりうばい取っていた。

「時々作ってくれる。焼きそばとかカレーとか。けっこう、じょう

ずだよ」

時々ですって。あきれたように、香奈子は大きく眉をあげる。

「食事は毎日のものですよ。時々以外の日はどうしているのよ。お

父さんが仕事でおそくなる時とか。あなた、ちゃんと食べているの」

香奈子の口調がきつくなった。

② 「いちおう食べてるよ。コンビニのお弁当とか。ポテトチップとか」

大夢の声は小さくなる。

「ポテトチップねえ」

「いちおう野菜だし」

大夢が答えると、香奈子は大きなため息をついた。紙と鉛筆を持っ

てきて、テーブルの上に置いた。

「先週、タイムくんが食べたものを教えてちょうだい」

香奈子の指示に、大夢は素直にしたがった。できるだけ正確に、

一週間分の食事内容を書いた。

お父さんがおそい日が三日あった。一日目はポテトチップと菓子

パンで B。二日目はカップラーメン。三日目はどうしたっ

け。その日に何を食べたのか思い出せなかった。

——勇者だって、獲物にありつけないこともあるさ。

孤独な旅をしていけば、空腹をかかえて眠る夜もある。それも試

練なのだ。大夢は思うことにしている。

「食べ物ってね、大事なのよ」

大夢の書いた献立表を見ながら、香奈子がいった。

「体をつくったり、心をつくったり。人が生きていけるように、内

側から守ってくれるのよ。今の自分だけではなく、未来の子どもの

元だっけつくってくれるのよ」

③ 香奈子は、料理学校の先生だった。大夢にもわかるように、くわ

しくていねいに栄養の大切さを話してくれた。

——知らなかったな。そうか、体も心も自分でつくっていけるんだ。

香奈子の言葉を、大夢は心の中でくりかえす。

今の夢にとって、食べ物は空腹を満たすものでしかなかった。味などわからなかった。まして、心をつくるとか未来をつくるとか、そんなたいそうなことを考えたこともなかった。

——ひょっとしたら、ぼくの未来も変えられるかもしれない。

55

大夢は時々、どうしようもなく自分の弱さを感じることがある。それは栄養が足りなかったせいなのだろうか。

「じゃあさ、栄養をちゃんととれば、強くなれるのかな」

あしたもあさっても、邪悪な軍団との戦いは続くだろう。体も心も強くならねばと大夢は切実に思う。身を守るためには、学校から家までを一気にかけてぬける体力が、どうしても必要なのだ。

60

「今よりはずっと強くなれるわ」

自信ありげに、香奈子がいった。

「口に入れるものを選ぶのはね、自分で自分をつくるということなの」

香奈子の言葉に、大夢はうなずく。

65

旅の途中で、薬草と毒草をまちがえたら、戦う前にたおれてしまっただろう。原野でオオカミのえじきになって終わりだなんて、残酷すぎる。大夢はぶるんぶるんと首をふった。

「大事なことだね。④ ぼくも料理を覚えたいな。小学生じゃ無理なかな」

70

大夢は、いつもお父さんにいわれている。火を使ってはいけない。

刃物を持つてはいけないと。 1

「そうね。お父さんが心配するのはもっともなことね。注意を

C と、大変なことになるもの。ゲームをしながらとか、テレビを見ながらとか、ぜったいにダメ。タイムくんは、約束を守ることができるかしら」

75

それはだいじょうぶだと、大夢は胸をはった。

「お願い、香奈子さん。ぼくに料理を教えてください」

姿勢を正し、大夢は香奈子に頭をさげた。 2

「そうねえ。料理学校はつぶれてしまったし、クマの相手ばかりじゃ

80

いらいらするし。うん、ちょうどいいわ、週に一回、タイムくんの専属の先生になってあげよう」

明るく笑う香奈子に、いつのまにか大夢もつられて笑っていた。

——さっき食べたシフォンケーキみたいだな。

香奈子といっしょにしていると、大夢の心までふわふわと温かくなってくる。 3

85

両手のこぶしをにぎり、大夢は、ヨッシ！ と声をあげた。

「お父さんに許してもらえるように、ぼく一生懸命たのおからね」

しとめたシカやイノシシの肉を調理できなくては、旅は続けられない。料理もまた、勇者への大事な修行なのだ。絶好のチャンス

90

をのがすわけにはいかない。大夢のやる気モードが、ジェット機の

ように上昇する。

「香奈子さん、青い葉っぱで、こんなふうにくるくる巻いている料理って、知っているかな」

大夢の記憶の中で、何かがぼんとはじける音がした。 [4]

「中にね、小さな肉とニンジンが入っているんだよ」

ニンジンのきらいな大夢に、なんとか食べさせようと、お母さんはいろいろと考えた。ニンジンをこれ以上ないほど細かく切って、肉に混ぜこんだ。湯気とスープのにおい。コトコトと鳴る黄色い※キャセロール。暖かなキッチン。お母さんの笑顔。大夢の涙腺が、またゆるんできた。

「それって、ロールキャベツのことかしら」

大夢の説明を聞いて、香奈子は推測する。大夢の食事表の横に、たわら型のロールキャベツの絵をかいた。⑤ それだ、と大夢が声をあげた。

「青い葉っぱはね、キャベツという名前を持っています」

香奈子は、キャベツの絵をかきたした。

大夢は食っているように、絵を見つめている。

⑥ 「そのロールキャベツを、いつかぼくに教えてほしいんだ。できれば、十二月三日までに作れるようになりたいんだけど」

えんりよがちに大夢がいった。

香奈子は小さく首をかしげて考えている。

「わかった。お父さんの誕生日なのね。そして、お父さんはロールキャベツが大好きってことね」

ピンポン。大正解。大夢がうれしそうにうなずく。お母さんの得意だったロールキャベツ。おいしいおいしいと笑顔全開で、お父さんはいつていた。

「ぼくね、お父さんの笑顔に、もう一度、会いたいんだ」

だから、ロールキャベツを作りたいと大夢がいう。その気持ちがいじらしかった。香奈子は、ぽんと胸をたたいて、

「まかせといて」

といった。

いつのまにか、日はかたむいていた。うす暗くなった室内を、ひんやりとした風が過ぎていった。

(吉富多美『チェンジング』)

※歴史物語……「大夢」が愛読している物語。

※クマ……「香奈子」の父親のこと。

※キャセロール……厚手でふたのある両手鍋。

問一 線 a 「家庭」 b 「場所」の熟語の読みは、次の組

み合わせになっていますか。それぞれ選び、記号で答えなさい。

ア、音と音 イ、音と訓 ウ、訓と音 エ、訓と訓

問四

A

C

号で答えなさい。

に入る言葉を次からそれぞれ選び、記

問二 ☆ に入る四字熟語を次から選び、記号で答えなさい。

ア、一心不乱 イ、一期一会 ウ、危機一髪 エ、心機一転

問三 線①とありますが、このように「香奈子」が思ったの

は、「大夢」のどのような様子からですか。次から一つ選び、  
記号で答えなさい。

ア、今は何が好きなのかわからないため、世の中のすべての食

べ物を食べてみたいと欲張る様子。

イ、栄養のかたよった食生活にあきあきして、もっと別の物を

食べたいと願っている様子。

ウ、最近は食卓に上らない、素朴な食べ物にも価値があるこ

とを知っている様子。

エ、食べた事のない未知の食べ物にあこがれを持ち、それを食

べることを夢見る様子。

問五

線②とありますが、このときの「大夢」の心情を表し  
たものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えな  
さい。

ア、毎日食事をとっていたが、香奈子に問いつめられ、食べて

いたものが食事と呼べるものか、自信がなくなっている。

イ、父親が悪いわけではないとかばおうとしたが、香奈子の厳

しい言い方に、負けそうになっている。

ウ、何も考えずに食事をしてしたが、自分の食生活の貧しさを

香奈子に責められ、悲しくなっている。

エ、食事をとらずにお菓子を食べていたが、香奈子に指摘され、

食事を作ってくれた父親にすまないと感じている。

問六 —— 線③とありますが、それによって「大夢」の食べ物に

対する考え方はどのように変化しましたか。解答らんに合うように答えなさい。

問八 本文には次の一文がぬけています。この一文を入れる場所と

して、最も適当な場所を 1 4 から選び、記号で答えなさい。

今までは ( ) 1 ( ) が、

話を聞いたことで ( ) 2 ( ) 。

料理は作った人の味なのかもしれないと、大夢は思った。

問九 —— 線⑤、⑥について次の問いに答えなさい。

問七 —— 線④「ぼくも料理を覚えたいな」について次の問いに

答えなさい。

(1) 「大夢」が「料理」と聞いて、まっ先に「ロールキャベツ」を思い浮かべたのはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

(1) 「大夢」が、「料理を覚えたい」と考えた理由として、  
~~~~~  
わしくないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

(2) 「大夢」は「ロールキャベツ」を作ること何を期待していますか。本文中から七字でぬき出しなさい。

ア、栄養をつけて、体を強くしたいから。

イ、刃物や火の使い方を知り、勇者に近づきたいから。

ウ、自分の未来を自分の力で変えたいから。

エ、きちんとした食事で、心を強くしたいから。

(2) 「料理を覚えたい」という「大夢」の意気込みがわかる、

比喩表現をいくむ一文を探し、最初の六字をぬき出しなさい。

問十 「大夢」はどのような人物として描かれていきますか。ふさわ

しいものには A を、そうでないものには B を答えなさい。

ア、いつも人から逃げてばかりいて、直接人と接することを恐  
れている人物。

イ、空想家で、歴史物語の勇者になりきったつもりで、大きな  
態度を取っている人物。

ウ、何事もまじめに取り組む素直さと、人を思いやる優しさを  
持っている人物。

エ、物事に興味を持ち、自分の未来について前向きに考え、努  
力しようとしている人物。

